

ボリンジャーの理解のために

——人とその学風——

小 西 友 七

D. L. Bolinger は今世紀後半の最も偉大なる言語学者の1人であることは、多くの人の一致した意見であると思われる。ボリンジャーといえば、私にはまず、構造言語学から生成変形文法へと、激動期のアメリカ言語学界にあって、不偏不党どの派にも属さず、またどの派をも超越した見識と洞察力をもって、実に幅広い分野において活躍し、かつ独特の風格を備えた言語学者像が浮かぶ。

次に氏の研究態度である。R. Quirk の言葉を借りれば、『Bolinger は自らを称して「勤勉なる母国語話者 (diligent native speaker)」と呼ぶことに満足している。しかし、一方には臨床的技法と豊かな資料を踏まえた経験を、また他の一方には好奇心旺盛な理論家の科学的知性を合わせ持つのである。その結果として氏は、研究にたずさわるに、常に「すべてに当たり、よきものをとる (Omnia probate—quod bonum est tenete)」の精神をもってし、また強力にして華々しく打ち立てられた諸説に異議申し立てをするに及んでは、議論の余地なき慣用法にかなった資料を、鋭敏な感覚による分析と合わせ、突き付けるのである¹⁾』。まったくこの通りである。

-
- 1) R. Quirk, Preface to Bolinger's *Meaning and Form* (1977) [中右実訳『意味と形』による]。クワークがボリンジャーを高く評価していることは、まず、今世紀後半の最大の文法書といわれる Quirk, et al., *A Grammar of Contemporary English* (1972) [GCE と略称] の校正を依頼して知見を仰いだこと、また予定されている改訂版 (1985) ではボリンジャーの *Generality, Gradience and the All-or-Nothing* (1961) の概念を改訂の基本に据えているということ、などでも察せられるであろう。この漸次的推移 (gradience) は氏のあとの著作 *The Phrasal Verb in English* (1972), *Degree Words* (1972), *Aspects of Language* (1968), などにも一貫して流れている氏の言語観の中でも重要な概念の1つである。

第三に、氏ほど多作の人はいないようだ。あっても数は少ないであろう。しかも古稀を超えても、年に大体5つ以上、それもどの1つをとって見ても、若々しく創意と卓見に富み我々の心を引きつけてやまない。そして、その間に、著書を織りませる、という実に超人的な活動ぶりである。八幡成人(1981)²⁾とその後の追加によれば、ゆうに280篇近くにのぼる。あの柔和な氏の風貌からは想像もつかない vitality である。

最後に、柔和といえ、氏ほど気前がよく世話好きな学者は少なからう。ある学者の評言によれば、気軽に質問に答え、頼めばどんな資料でも送ってくれる、というのである。日本でもその恩恵を受け、文通によってその指導を受けている言語学者、英語学者は、私の周囲に数え切れないほどいる。論文に対する微に入り細にわたる助言やコメント、問いに対するだれよりも早い応答、どの1つをとっても、他の人の追従を許さないところであろう。

そのせいもあってか、氏ほど国境を超えて、多くの記念論文集 (Festschrift) に招待されている学者もめずらしい。私の目についたものを(予定されているものも含めて) あげると、

‘The Imperative in English’ in *To Honor Roman Jakobson* Vol. 1 (1967)

‘The syntax of *Parecer*’ in A Valdman (ed.), *Papers in Linguistics and Phonetics to the Memory of Pierre Delattre* (1972)

‘John’s Easiness to Please’ in G. Nickel (ed.), *Special Issue of IRAL on the Occasion of Bertil Malmberg’s 60th Birthday* (1974)

‘Essence and Accident: English Analogs of Hispanic *Ser-Estar*’ in B. B. Kachru *et al.*, (eds.) *Issues in Linguistics: Papers in Honor of Henry and Renée Kahane* (1973)

‘Concept and Percept: Two Infinitive Constructions and Their Vicissitudes’ in *World Papers in Phonetics: Festschrift for Dr. Onishi’s Kiju* (1974)

2) 島根県立平田高等学校研修第14号。

‘A Semantic View of Syntax: Some Verbs that Govern Infinitives’
in M. A. Jazayeri, E. C. Pölmé, and W. Winter (eds.), *Linguistics and Literary Studies in Honor of Archibald A. Hill* Vol. 2(1978)

‘The Jingle Theory of Double -ing’ in D. J. Allerton, E. Carney, and D. Holdcroft (eds.), *Function and Context in Linguistic Analysis: A Festschrift for William Haas* (1979)

‘Couple: An English Dual’ in S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (eds.), *Studies in English Linguistics: For Randolph Quirk* (1980)

‘The go-Progressive and Auxiliary Formation’, to appear in A. Makkai and V. Makkai (eds.), *Festschrift for Charles Hockett*

‘Some Intonational Stereotypes’, to appear in P. R. Léon and M. Rossi (eds.), *Festschrift for George Faure*

‘Surprise’, to appear in L. J. Raphael, C. B. Raphael. and M. R. Valdovinos (eds.), *Festschrift for Arthur Bronstein*

と十指をこえる。

このように世界的に著名な大学者でありながら、日本には一度も訪れていないし、また氏の著作について翻訳はある種の難解さゆえに前述の中右氏の1冊しかない。それゆえ、今回標題のような形で、氏の人となりや経歴を通じて氏の学風を紹介をと思い立ったが、もとより適任者でなく Fools rush in... の感なきをえない。予備的、臨時的なものとして、真の紹介者の前の橋渡しの1つにでもなれば幸いである。

スペイン語教師として

——反オーソドックス精神——

氏の略歴を *Directory of American Scholars, Contemporary Authors, National Cyclopaedia of American Biography, Biographical Dictionary of American Educators* などの各巻を調べたところをまとめると、概略、次のようである。

1907年8月18日 Kansas 州 Topeka 生れ、父は Arthur Joel (判事)、母は Gertrude (Ott)。1930年 Washburn Univ. B. A., 1932年 Kansas Univ. M. A., 1936年 Wisconsin Univ. Ph. D. 取得。そのあと Wisconsin Univ. (スペイン語) 講師 (1936), Junior Col. of Kansas City (スペイン語) 講師 (1937), Washburn Univ. (スペイン語) 準教授 (1937—44), Southern California Univ. (スペイン語) 助教授 (1944—46), 準教授 (1947—48), 教授 (1949—60), Colorado Univ. (スペイン語) 教授 (1960—63), Harvard Univ. (ロマンス語学文学) 教授 (1963—73), 名誉教授 (1973—)。

その間 Sterling Fellow in Linguistics at Yale Univ. (1943—44), Research Fellow in Speech at Haskins Laboratories (1956—57) として研究生活を送り, the Northeast Conference Award for Distinguished Service and Leadership in the Foreign Language Teaching Profession (1979), the George Orwell Award of the National Council of Teachers of English (1981) などを受賞した。また一方において, 1960年「米国スペイン語・ポルトガル語教員研究会」(American Association of Teachers of Spanish and Portuguese), 「アメリカ言語学会 (the Linguistic Society of America; 略称 LSA)」, 1975—76年には「カナダ・合衆国言語学会 (the Linguistic Association of Canada and the United States; 略称 LACUS) の各会長はじめその他の学会の要職に推された。

上の履歴を検討すると、氏の教職生活 (1936—73) 37年のうち、注目すべきは、Harvard に移る前の27年間はスペイン語の教員であったということである。27年といえば1つの職の終りである。いわばその定年後に初めて (ロマンス語科で) 言語学に接するようになったわけである。というのは、言語学界の最も激しく揺れ動いた時期で、氏の経歴中最も長く在職した南カリフォルニア大学 (1944—60) には当時言語学科もなかった。しかも1969年まで太平洋岸ではアメリカ言語学会 (LSA) すら開かれていない。文字通り、氏はアメリカ言語学界の主流から完全に外にあったわけである。

氏の英語学、一般言語学の論文集である *Forms of English* (1965) の「ま

えがき」で “Linguistics is my business, though I came too late to get it in my blood.” とあるようにあまりにも遅すぎた¹⁾。スペイン語の世界に浸っている間に、新言語学に出遅れをとったのではないかと考えられる。このことが、私の推測を許していただくなれば、体制派的、正統派な考え方を潔しとしない氏の性向をいっそう助長したのではないかと思う。この著書に収められた多くの論文は、特に構造言語学に対して批判が手厳しい。たとえば冒頭の ‘Intonation Levels versus Configurations’ という論文からして（これは *Word* 7(1951) で構造言語学の全盛期に発表されたものであるが）、構造主義者の打ち建てた重要な概念である4つの音素と3つの接続は英語のイントネーションを正しく記述するものでないとして真向から否定し去っている、といったぐあいである。

また一方、構造言語学から変形文法に移ったアメリカの言語学者を “Most American linguists, like American Rotarians and American Baptists, are enthusiastic joiners.” と述べて、時流に走る彼らの節操なきをなじっている。新言語学ならではのこの時期に、これだけのことを著書のはしがきに書くことはよほど勇気のいることである。これには、それだけ氏自身の心の奥に期するところがあったものと思われる。つづいて氏は、

Perhaps being somewhat of an outsider has helped me to see one or two of the ten or a dozen questions treated here more clearly than if I had tangled with them hand to hand. I don't know. I hope so.

と述べ、むしろ局外者として距離を置いて観察できる有利な点を強調してい

1) 略歴でふれたが、氏は1943—44年 Sterling Fellowship を得て、Yale の大学院で研究生生活を送っている。ちょうど第2次大戦の最中で、ここで氏は当然構造言語学に接したはずである。しかし意味を追放したこの物理主義の理論には興味は湧かなかったらしい。この頃調査してあとでまとめた ‘Interrogative Structures of American English’ *PAD* 28(1957) [ちなみにこれは184ページにのぼり論文というより著書というべきで1巻全部をこれに当てている] の序文の謝辞として “For the initial impetus that led to this work I am indebted to the Yale Graduate School, which in 1943-44, through a Sterling Fellowship, gave me the leisure to philosophize even in those frenetic days of war. That the seed planted then has taken so long to bear fruit does not diminish my gratitude for the unearned favor.” と述べており、この折の英語学研究成果の1つとみられる。

る。余裕すら感じられる一文である。

やがて変形文法の全盛期に入る。構造言語学では、先ほどふれたように意味を避けていたので初めから受けつけなかったようであるが、変形文法はそれを真正面から扱うので最初はそれを歓迎したのである。しかし、これが新しい在朝哲学の座を占めるようになると、権威に対する抵抗となって現われてきた。J. L. に宛てた自伝的な書簡の中で次のように述べている。“...But my formation was largely through resistance to structuralism rather than adherence to it... I welcomed the opening up of new lines with the advent of TG, but when that became a new orthodoxy I felt myself as much on the outside as ever.”

たとえば、1967年に発表した ‘Adjectives in English: Attribution and Predication’ は当時変形文法の中で広く受け入れられていたと思われる標準理論の中でも、形容詞変形は非常に理路整然としているがゆえにこれに対する疑問はあまり取り上げられなかった背景において発表された論文である。氏は形容詞の用法を考察するにあたって、統語論と意味論、さらに語用論との関係を取り上げ、ある言語現象が実際の言語使用を無視して統語論内だけで一般化、形式化されることの不備を批判したものである。この考察が形容詞に限らず、それまでの理論中心主義全体に及ぶことを示しており画期的なものといえよう。

標準理論に対する批判はその翌年の ‘Judgments of Grammaticality’ でいっそう明確に現われる。N. Chomsky, R. Jackendoff などの解釈意味論のモデルに対して、G. Lakoff, J. R. Ross などの間に生れた生成意味論 (generative semantics) 的な考え方を支持するようになっている。

ともかく、いずれの学派も理論を立てて言語を一般化、形式化を計ろうとするが、そう安直に考えてもらっては困る、と氏は考えているようである。星印をつけて出された data が正しく星印がつけられているか、こんな例はどう処理するのか、それよりもこう解釈すればどうか、…となって旺盛な批判精神は止まるところを知らない。そして、先の書簡の中で次のように心中

を吐露している。

I have never been good at excluding chunks of language in order to declare that language is purely thus-and-so. I've always believed that while one must pick a subject and stick to it, excluding irrelevant asides, I've never been willing to shut out evidence I deemed pertinent regardless of where it came. And it was so much more fun dealing with unexpected things than to keep on plowing the same old furrow!

これは、何よりも資料を大切に、何ものにもとらわれないで自由にものを考え創造する英知と共に、オーソドックスなものに対する不屈の反骨精神に溢れた言葉であろう。

次に、氏の長年にわたるスペイン語教師として教壇に立っていたことについてもう1つのことが考えられる。いわゆる語学教師としてスペイン語やスペイン文法を教えているとき、抽象的な言語理論よりは、スペイン語をいかに読み書き話すように教えるかという実際的な問題にぶち当たる。たとえば英語とスペイン語の2言語の比較対照などの身近かな具体的なことに焦点が絞られ、抽象的な机上の論にははじめなくなることになるであろう。これがまた氏をして双手をあげて理論文法に入り込めないものを感じさせたにちがいない。氏と親しい間柄にあり氏がよき理解者であった伝統文法学者 R. Long (1906—76) の追悼文に見られる次の文章は、長年外国人学生に英語を教えた故人に、むしろ同じ語学教師としての自分の心境を彼に託して語っているかのように思われる。

Ralph Long the writer is impossible to separate from Ralph Long the teacher. He had the advantage of teaching English as a foreign language throughout his career—he met his first group of foreign students, from Mexico, in 1933, and his years in Puerto Rico... gave him a perspective that no mere theoretician could match. The explanations in his grammar were meant to be *used* [原文イタリック体] by students struggling to express themselves, not to impress a colleague or bolster a theory.

—TESOL Quarterly Vol. 10, No. 2

最後の数行は特に胸を打つものがある。と同時に理論一辺倒に傾きがちな時代の風潮に対する痛烈な警鐘ではないだろうか。

スペイン語研究から得たもの

——談話文法的視点；意味と形式——

同じ語学教師としても、R. Long と異なり、氏の場合はスペイン語という外国語の教師であり、そのスペイン語の知識が、氏の言語学、英語学の研究に大きく貢献したことは否めないであろう。ゲルマン系統に属する英語とロマンス系統に入る異質なスペイン語の2ヶ国語に精通することは、普通のアメリカの言語学者よりは言語そのものが、よく「見える」のではないかと思う。氏には英語学の人びとにはあまり知られていないと思うが、*Intensive Spanish* (1948), *Spanish Review Grammar* (1956), *Modern Spanish* [共著] (1960, 1966²) などの単行本のほかに、‘Still More on *Ser and Estar*’ (1947), ‘1464 Identical Cognates in English and Spanish’ (1948), ‘Discontinuity of the Spanish Conjunctive Pronoun’ (1949), ‘The Comparison of Inequality in Spanish’ (1950), ‘Reference and Inference: Inceptiveness in the Spanish Preterit’ (1963), などを初めとするその他数多くの論文がある。氏のこうしたスペイン語研究から、言語学、英語学の研究に何らかプラスになったものがあるはずである。これにスポットをあてて考えてみよう。

正面から両語の対照関係を扱った ‘Postposed Main Phrases: an English Rule for the Romance Subjunctive’ (1968), ‘Modes of Modality in Spanish and English’ (1970), ‘Essence and Accident: English Analogs of Hispanic *Ser-Estar*’ (1973) など標題に明示したものもあるが、そうでないものもある。¹⁾たとえばスペイン語の語順から示唆を受けたと考えられる

1) また中には ‘Do Imperative’ (1974) に見られるように、スペイン語の *Está alegre* (He is cheerful). *Es feliz* (He is happy) は形容詞の時間的長短によって動詞が異なるが、それに対応する英語には、命令文で Be cheerful./Do be cheerful. と

‘Linear Modification’ がある。これはすでに1952年に発表されたもので我が国にも早くから紹介されている²⁾。その内容を簡単に述べると、たとえばスペイン語の *Juan canta* (Juan sings) と *Canta Juan* (Sings Juan) において、前者は通例 Juan sings (for living), 後者は通例 Juan is singing という意味になる。これは *Juan canta* では *canta* は *Juan* の意味を限定して狭める (氏はこれを「修飾」と呼んでいるのである) ために「Juan は生活のために、他のことをしないで歌を歌う」なるに対し、*Canta Juan* は *Juan* は *Canta* を修飾するから、「歌うのは他の人でなく Juan である」という意味合いになる。

un hermoso edificio (a beautiful building), *un edificio hermoso* (a building beautiful) のような「形容詞+名詞」「名詞+形容詞」においても同様のことが考えられる。英語の場合でもこれは前者が「恒常的」、後者は「一時的」ということになり、後に氏はこれを ‘Essence and Accident’ (1973) などですらに発展させている。

副詞について

- (a) *Slowly* he backed away.
- (b) He *slowly* backed away.
- (c) He backed *slowly* away.
- (d) He backed away *slowly*.

において、いずれも「ゆっくりあとずさりした」だが、(d)から(a)に移るにしたがって意味が希薄になるというのも、上に述べた修飾関係から、容易に察知されるであろう³⁾。

Be happy. /*Do be happy. と do との共起に制約がある、などといった言及も随所に見られる。

- 2) 佐々木達『言語の諸相』(昭和41年)「語集合の構造と種別」(pp. 82-101)。
- 3) I left *out* both pages.

I left both pages *out*.

などの「動詞+副詞結合」もこの原理で取り扱っているが、これは後に、A. G. Kennedy (1920) 以来の本格的な著作 *The Phrasal Verb in English* (1972) となつて開花されたとみられる。ちなみに、氏はこの書で、変形文法の「不変化詞移動規則」(particle movement) に反省を促した点は見逃せない。

氏のいわゆる「広から狭への連続体」(‘broad-to-narrow’ sequence) は Jan Firbas (1957) の ‘theme-to-rheme’ sequence) に対応するものである。トピックからコメントへとか、旧情報から新情報へとかともいって言葉は違うが、結局同じことをいっているように思う。これは談話の単位として文を考える際、今日ではほぼ常識となって定着していると考えられる。

If you come I'll help you. —invitation に近い

I'll help you if you come —only if...

の副詞節の位置によるニュアンスの違いなど、それまでふれられたことがないように思う。

Do you see her Tuesdays? に対して、

No, Tuesdays I stay home.

**No, Mondays I see her.*

No, I see her Mondays.

のような累加的対照 (cumulative contrast) などは談話文法では、文と文との接続関係からみて重要な点の1つである。言語学で扱う最大の単位はセンテンスであると考えられていた時期に、氏は早くも談話というセンテンスを超えたものに眼を向けていたことは注目すべきであろう。後に氏にはこれを正面から扱った ‘Pronouns in Discourse’ (1979) などその他いくつかの論文が見られるが、ここで重要なことは、これが氏の文法性の判断の基準になっているということである。²⁾

先の ‘Judgments of Grammaticality’ において文法性を論ずる際、あくま

Forms of English に付け加えられたこの論文のアブストラクトにはこの副詞の位置について次のような興味あるスペイン語との対照例をあげている。

(*She sweetly kissed him.*

Le dio un dulce beso. (=She gave him a sweet kiss)

(*She kissed him sweetly.*

Le dio un beso dulce. (=She gave him a kiss [that was] sweet)

sweetly の意味は前者より後者のほうが強調的であることは明らかである。

- 1) もっとも文文法と談話文法は、それぞれ、その目標において異なっている。が、しかし、相補的な面も多い。これについての詳論はここでは差し控える。
- 2) この論文の冒頭に ‘In books on logic they will tell you that it is absurd to say that yellow is tubular or gratitude is heavier than air; but in that mixture of

でもセンテンス内的なもので規則化しようとする Chomsky 流の考え方と意見を異にするのもそのためである。たとえば、

*The girl was turned to.

では逸脱文であるが、

‘The boy and his mother were unable to help.’

‘And what finally happened.’

‘The girl was turned to. She got the assistance that was needed.’

では正文であると説くのを見れば、彼の文法観がどんなものか容易に理解できよう。彼は文脈化 (contextualization) という概念を重視し、文脈の中において文を考え、さまざまな場面を設定してそれに答えようとするのである。

Meaning and Form (p. 23) で

[5] *Anybody* hadn’t better try that with *mé*!

の説明で「[5] に代えて *Nobody* had better try that with *mé*! (だれもぼくにそんなことをしないほうがいいぞ) というふうにすれば、問題になっている状況に関する (about) 意見を述べていることになり、その状況に向けられた (addressed to) 意見を述べていることになる。[5] は声の届く範囲内にいるすべての任意の人を、脅かすような顔つきで見すえて発話されている、という状況が想像できる」(中右訳 p. 43) とある。この[5]に示されたような *any... not* はif 節でパラフレーズされる関係節で修飾される場合を除いて通例非文とされる。この疑問に対して、氏は次のように答えている。

The example “*Anybody* hadn’t better try that with *mé*!” is normal in my speech and accordingly ‘correct’. If one judges correctness by rules that have been set up by grammarians who are looking for syntactic rather than semantic correlations, then it could be called incorrect... 『英語教育』1983. 1. Q. B. の小稿参照]

以上のことから、氏の意味論というときは、広義の意味論で、文の意味論

incongruities that makes up the self yellow may well be a horse and cart and gratitude the middle of next week.’ と Somerset Maugham, ‘A Friend in Need’ (1941) からの引用文を掲げているが、氏の文法観を象徴するものである。

ではなく、談話の意味論ともいうべきものであり、それに語用論の意味論ともいうべきものも含まれていることが窺知されるであろう。彼の言語観、文法観はこのような広い視野に立つものである、といえよう。

談話的、語用論的視点と同じく、氏がスペイン語研究から何らかの形で影響を受けたと考えられるものに「形式と意味との対立」があるように思われる。これも前述した‘Linear Modification’などの研究の延長線に連なるものといえよう。つまり、当然語順による意味の違いは、他の類似の文法形式とその意味の違いに発展統一されるはずのものである。スペイン語の代りに英語で置き換えて想像をめぐらせてみよう、たとえば

(a) I believe him honest.

(b) I believe him to be honest.

(c) I believe that he is honest.

といった文があるでしょう。これらの文は、おそらく一般的にあるいは教育的配慮から(a)=(b)=(c)と言われるが、単語について意味も機能も全く同じという完全な同義語(perfect synonym)がないのと同様に、言語経済からみて完全な同義文はないと考えるであろう。表面的に同じか、単に類似的な文というにすぎないのではないか、どこか違うにちがいない。そうすると、それはどう違うのか、と疑問を懐くことになるだろう。これが母国語だと何気なしに見過ごしがちだが、外国語となると意識的に考えるようになる。4半世紀以上にわたるスペイン語という外国語の教授研究は、自国語についても、対照言語との比較などを通じて、ただでさえも天才的な言語学者をして、いっそう観察眼を鋭くさせていったのではないだろうか。

1) (a)(b)(c)にはたとえば次のような制約がある。

The doctor has told me John has cancer, and

I believe { *John (to be) sick.
that John is sick.

Christians believe { ? the Vicar of Christ infallible.
the Vicar of Christ to be infallible.
that the Vicar of Christ is infallible.

こうした積み重ねが、やがてはかの有名な意味と形とは一対一の対応関係 (one form for one meaning, and one meaning for one form) をなして、
「形が異なれば意味も異なる」という言葉に凝縮され、牢固として抜くべからざる信念となって、氏の1つの言語哲学というか言語理念というか、そうしたものにまで高められていったものと想像される。例を変えて示すと、上記のような類似構文のみならず、たとえば、

I noticed (that) you were there.

Across the street (there) is a grocery.

のような that や there の出沒にも見られる。前者の that の省略は、従来あいまいさを避けるためとか、スピーチ・レベルのためとかいった説明がなされていたにすぎなかった。氏は *That's That* (1972) において、こうした種類（関係詞の省略も含む）の統語形式の相異についても、それを含む文と省略した文は意味的に対立していることを示そうとしたものである。さらに、*Meaning and Form* は本の題名の示すとおり、「形式と意味」とについての年来の考えを集大成させた書というべきであろう。

先に延べた談話的、語用論的視点、それにこの意味と形式の対立は、それぞれ氏の言語を支える太い柱の1つになっている、とみてよいように思われる。

家 庭 の 影 響

——言語と社会——

彼の著作を見ていると、言語学者に珍しいことには、‘What is Freedom?’ (1941) といったモノグラフや ‘Universal Military Training’ (1945) ‘Democracy: the Perversion of Consensus’ (1966), ‘A Common-Sense Solution to the Canning-Lid Crisis’ (1975) などといった発言のあることである。こうした政治的、社会的な関心はどこからきたのであろうか。氏の先の書簡の中で、“I must confess that I am not “deep” into the question of Language and the law, but the subject has always fascinated me

(my father was a lawyer, and I had to sharpen my wits to contend with that)...”と述べ、父 Arthur 氏の影響のあったことを認めている。法律を職とした家庭に育ち教育された人にとって上のような発言は自然なものとなづける。と同時に法律といえあコード性の高い言語のことを思い浮かべる。そしてまた、アメリカの法曹界での Webster 大辞典のスティタスに結びつく。有名な話でご存知の方も多と思われるが1913年1月19日の *New York World* に載った新聞記事を見ればその一端が知られよう。

Dictionary Saves Him When Arraigned for

‘Fouly’ Greeting Girl

Hagerstown, Md., Jan 18--- Starner was arrested on complaint of a young woman who charged that he had accosted her with: ‘Hello, chicken.’ ‘Your Honor,’ said Starner when arraigned, ‘I don’t see that I did anything wrong. I called the young woman “chicken,” a perfectly proper term. Just look in Webster’s dictionary and you will find that I have transgressed no laws.’

Magistrate Moore rummaged through his desk until he found an antiquated copy of Webster and turning to the word in dispute found: ‘Chicken—The young of various bird, a child, a young woman.’ Magistrate Moore discharged the prisoner.¹⁾

長々と引用したが、伝統の浅いアメリカではこうした場合に抛りどころとするものがなく、いかに人びとが linguistic authority を求め、辞典特に *Webster* がその役割を果たしてきたかを示した例である。それと共に重要なことは、また言語がいかに我々の社会生活に権力を振り、どのように力を行使するかを如実に示した好例でもある。

1) 以上は D. Cook, ‘A Point of Lexicographical Method’, *American Speech* Vol. 34, No. 1 から引用。この判事さんの引いたのは *Webster* の大辞典ではなく小型版らしいが、この辞典の権威のほどがうかがえる。ちなみに、1909版の *Webster* には、‘chicken, n... 4, A young or youthful and inexperienced person; also a timid person, “Stella is no chicken” (i. e. no longer young) Swift.’ と出ている。

このようにして、氏は言語はもとより、言語と法律の問題に興味を懐くようになったのではないかと思われる。これが後になって、氏の言語学概説書として定評のある *Aspects of Language* (1968, 1975², D. A. Sears と共著 1981³) の第2版から加えられた 'Language and the Public' というユニークな章となって出現したものではないか、と推測してもそう誤りではないであろう。そして、最後に、言語がいかに人間の社会とかかわりをもっているか、こうした諸問題をさらに本格的に取り上げたのが、*The Loaded Weapon: The Use and Abuse of Language* (1980) である。この方面の研究は、一時、言語学の主流からは等閑に付せられていた、というより扱いえなかったようであるが、半世紀ぶりの氏ならではの快著というべきであろう。

む す び

以上は、ボリンジャーの文法、語法領域に関するものをごく一部垣間みたにすぎない。取り残したものがあまりにも多いことをおそれる。*Aspects of Language* (第2版, p. 552) の言葉を借りれば、氏に対して 'Another blind man is describing this linguistic elephant' といわなくてはならないであろう。氏にはさらにこのほかに、氏の大きな活動分野として韻律論 (prosody) と語彙論 (lexicology) がある。が、これらはすべてまたの機会に譲らねばならない。ただ、氏には、世界の音声学者から贈られた L. R. Waugh & C. H. van Schooneveld (eds.), *The Melody of Language and Intonation* (1980) という、1つの記念論文集がある。これは、この標題からも分かるように韻律論の分野である。これからも気づかれるように、氏の学問の本領はむしろこの分野にあると思われる。それと、最近、*Intonation and Its Parts: Melody in Spoken English* (1984) が出されたことを付け加えておこう。